

そこにあって、そこにはないもの ——ジェンドリンが提唱する新しい現象学——

三村 尚彦
(関西大学)

はじめに

現象学研究者にとって、ユージン・ジェンドリン (Eugene T. Gendlin, 1926-) の名前と業績は、おそらくほとんど馴染みがないであろう。ジェンドリンは、人間性心理学 (humanistic psychology) の分野で著名な臨床心理学者である。1926年ウィーンに生まれ、12歳の時、ナチスから逃れるために家族とともにオランダを経由してアメリカへ移住¹。シカゴ大学にて哲学を専攻し、ディルタイの研究で修士号 (1950) を、さらに論文「象徴作用における体験過程の機能」(1958)にて博士号を取得し、『体験過程と意味の創造』(1962、以下 ECM と略記)として出版する。ディルタイ哲学の一研究者であったジェンドリンは、クライアント中心療法の創始者であるカール・ロジャーズにも師事し、クライアントの体験とその言語化、およびそこで生じるクライアントの自己理解に関して、カウンセリングの実習をふまえて考察した。その成果が、体験過程理論 (Theory of Experiencing) である。この理論に基づいて確立された心理療法の理論と実践が、フォーカシング指向心理療法 (Focusing-oriented psychotherapy、その一般的呼称がフォーカシング focusing) である。心理療法研究とディルタイ哲学の影響関係を論じた田中秀男によれば、ジェンドリンは、第一に哲学者、第二に心理療法の理論「体験過程理論」の創始者、第三に心理技法「フォーカシング」の開発者という三つの側面をもっている²。この中でもっとも広く認知されているのは、三番目のフォーカシング関係の仕事であり、世界各国でフォーカシング研究が盛んになればなるほど、ジェンドリンの哲学的・理論的業績は影に埋もれていく印象があると、池見陽は述べている³。おそらく戦略的にジェンドリン自身

1. この間の事情については、Oskar Frischenschlager (hg.), *Wien, wo sonst. Die Entstehung der Psychoanalyse und ihre Schulen*, Wien: Bohlau Verlag, 1994, S. 174-181 が詳しい。

2. 田中秀男「ジェンドリンの初期体験過程に関する文献研究 (上): 心理療法研究におけるディルタイ哲学からの影響」『図書の譜: 明治大学図書館紀要』8, pp. 56-81。

3. ジェンドリン・池見陽 『セラピープロセスの小さな一歩: フォーカシングからの人間理解』金剛出版、1999年

が「この実践〔フォーカシング〕を行うために、哲学を理解する必要はない」(NPCF, p. 149) と述べていることも、影響しているかもしれない。

その一方で、近年ジェンドリンの哲学を取りあげた研究書が出版されはじめ、さらに国際会議も開催されている⁴。心理療法の実践のうちで見いだされる意識体験を、現象学、解釈学、言語哲学（言語行為論やメタファー論など）をふまえて論じているジェンドリンの仕事は、心理療法と現象学の双方に対して、問題提起をしていると言えるだろう。「わたしの理論的な定式化に従うならば、心理療法は現象学的である」(EP, p. 310)。

本論考では、ジェンドリンが語る「新しい現象学」について考察していく。まず、ジェンドリンの「体験過程理論」を簡単に概観し、体験と区別される「体験過程」の内実を確認する (I)。次に、ジェンドリンが提案している「非論理的ステップとしての現象学」「進展の新しい現象学」とは、いかなるものなのかを見ていく (II)。さらに、意味の創造という観点から、「新しい現象学」の特徴を明らかにし (III)、結論として、このような提案をどう受けとめるべきなのか、私見を提示していきたい。

1. ジェンドリンの「体験過程理論」

ディルタイ哲学やフッサールをはじめとする現象学を研究していたジェンドリンが、ロジャーズのクライエント中心療法を参照しながら探究した問いは、どのような場合に心理療法が成功しているのか、効果をあげているのか、というものであった。ジェンドリンは、セラピストとクライエントの面接の膨大な録音記録を分析し、セラピーが一定の成功を収めるポイントは、クライエントが何を話すかではなく、どのように話すか、いかなる仕方でその発言が生じているのか、にあることを明らかにした。言い換えれば、クライエントの体験内容ではなく、当人がどのように体験しているのかという作用面が、セラピーにおいて重要な機能を果たしているということである。これに対応するジェンドリンの術語が、内容による構成物としての体験 (experience) と、主観によって生きられ、直接的に捉えられるものとしての体験過程 (experiencing) との区別である。「体験は、われわれがどのような瞬間にももっている感情の流れ、その一部ははっきり定まっていないような流れとして考えられなければならない。それをわたしは、『体験過程』と呼ぶことにし、望むならばい

4. 例えば、諸富・村里・末武編『ジェンドリン哲学入門 フォーカシングの根底にあるもの』コスモス・ライブラリー、2009年や、Levin, *Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy* などが挙げられる。国際会議としては、2008年3月29日ニューヨークで開催された「心理療法における暗黙的なものの役割を照射しうる、いくつかの哲学的概念」や、ワイトゲンシュタインとジェンドリン哲学の関係が主要テーマとなっている2011年7月8～11日開催予定の Philosophy of Psychotherapy Conference (University of East Anglia, Norwich, England) がある。

つでも内的に触れていくことができる感情の流れを表す用語として使う」(ECM, p. 3)。さらに体験過程は、論理的概念によって把握されるのではなく、身体的に感じられる具体的かつ前概念的 (pre-conceptual) な意味 (meaning) とされる。体験過程理論を体系的に論述した ECM では、「感じられた意味」⁵ (felt meaning)、「体験された意味」(experienced meaning) などの言い方もされている。これらの用語を用いるならば、有効なカウンセリングとは、次のように表現できるだろう。セラピストとのやりとりの中で、クライアント自身が、前概念的で身体的な体験過程、それ自体意味を有している体験過程に触れる、直接照合 (direct reference) する。それを通じて、クライアントのうちで、知性的、論理的に把握していたものを越えた、身体的に感じ取られている意味にもとづく自己理解が立ち上がってくる。こうした自己理解の進展によって、ストレスなどからの解放感が生じ、カウンセリングの効果が見いだされる。これが、ジェンドリンの体験過程理論の枠組みであり、体験過程、felt meaning に触れるための技法が、フォーカシングということになる⁶。

では、こうした心理療法に関する議論と、ジェンドリンの哲学的思索はどのような関係にあるのだろうか。「体験過程」と訳されている experiencing は、言うまでもなく experience の動名詞形であり、そもそも「体験すること、その働き、作用」を意味している。また先の引用にあるように、体験過程、felt meaning は、「感情の流れ」とされていた。こうしたダイナミックな流れである体験過程、felt meaning が心理療法や認知において果たしている機能を理論的に捉えようとするとき、われわれは固定的な論理的概念をそれに押しつけて (impose) しまうのではないだろうか。言語化に先立つ体験過程に言語や論理的図式でアプローチして、その生き生きとした働きは捉えられるのだろうか。前概念的な意味に、概念的意味を用いて迫っていくことは可能なのか。可能だとすれば、それはどのようにしてなのか。これが、ジェンドリン哲学に一貫した問いである。「暗黙的な複雑さは、われわれが語っているもののうちで機能しつづけているが、そのことについての考え方、論じ方をわれわれは見いだしたい。暗黙的な複雑さがそのことをいかに行っているのか、そのことが語られるようにしたいのである」(TBP, p. 46)。ただし、ここで一つ注意を要することがある。こうした問いの立て方は、felt meaning と論理的図式を対立させ、前者の優位を主張しているように思われるかもしれない。しかし、ジェンドリンは、論理的概

5. 意味が感じられるという事態と、術語としての「感じられた意味」を区別するために、以下では、術語に対して felt meaning と表記する。ちなみにジェンドリンは、後に felt meaning をフェルトセンス (felt sense)、複雑さ (intricacy)、より多くのもの (the more)、暗黙的なもの (the implicit) などとも言い換えている。

6. ジェンドリン自身によるフォーカシングの最適な解説書として、*Focusing* (second edition. New revised instructions), New York: Bantam Books, 1981. 邦訳『フォーカシング』村山訳、福村出版、1982年や、ジェンドリン・池見陽『セラピープロセスの小さな一歩：フォーカシングからの人間理解』金剛出版、1999年がある。

念、図式にもそれ固有の価値と機能を認めており、あくまでも両者の相互作用を重視していることを見落としてはならない。「論理を軽視することは、現在のわれわれの世界にあって大きな誤解である」(RO, p. 405)⁷。

以上をふまえると、ECMでの問いとは、felt meaning とシンボルの機能的関係、およびそれにもとづく意味の成立に関する考察であり、心理療法に方法的原理を与える哲学的なタイプに属するものなのである。「わたしは二つのタイプの議論を区別している。哲学的タイプのものは、概念そのものの本性、その判断基準、使用方法、形成を考察する。一方、科学的タイプの議論は、主題—内容領域に関係する」(ECM, preface, xxv)。

以上、ごく大まかに体験過程理論とジェンドリンの哲学との関係を概観し、体験過程は、言語化以前に身体的に感じられる意味であり、そこに触れていくことが心理療法にとって重要であること。また体験過程、felt meaning の働きを捉える方法論を考察するためにジェンドリンが哲学的思索を展開していること、を確認してきた。こうした構想を進めていく際、ジェンドリンは現象学に言及し、現象学から強い影響を受けていると再三述べている。次に、ジェンドリンが提唱する「新しい現象学」の内実を見ていくことにしよう。

II. ジェンドリンの「新しい現象学」

ジェンドリンは、初期の段階から現在に至るまで、現象学を主題とした多くの論文を書いている。主なものをあげると、「経験的現象学」“Experiential phenomenology” (1973)、「2人の現象学者は食い違っているわけではない」“Two phenomenologists do not disagree” (1982)、「非論理的ステップとしての現象学」“Phenomenology as non-logical steps” (1989)、「進展の新しい現象学」“The new phenomenology of carrying forward” (2004) などである。これらの論文のなかで、ジェンドリンは自らが強く影響を受けた哲学者として、繰り返しフッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、サルトルらの名前を挙げている⁸。ではジェンドリンは、現象学からどのような影響を受けたのであろうか。ここではフッサール現象学に限定して、論を進めていくことにしよう。

7. 同様の論点は、FPにおいても強調されている。世界の事象をそれぞれ独立した単位・ユニットに分割し、それを再構成することによって説明しようとする理論モデル・ユニットモデルと、フェルトセンス・felt meaning への直接照合による世界の捉え方を基盤とする展開モデルは、相互に補い合う関係となっている。Cf. FP, p. 360。

8. ECMの第1章補遺では、フッサール、メルロ＝ポンティ、サルトルについてそれぞれ章立てして、その影響関係について述べられている。特に主題的に独立した論じた論文では、メルロ＝ポンティに関して“The primacy of the body, not the primacy of perception”、ハイデガーについて、“Befindlichkeit: Heidegger and the philosophy of psychology” などがある。

ECM 第1章の補遺でジェンドリンは、フッサールの『論理学研究』を引用しながら、フッサール現象学からの影響について語っている⁹。意識与件の直観という現象学的方法は、ジェンドリンのいう直接照合であること。フッサールは「感じられた体験過程」とは言っていないものの、意味付与体験について語っており、意味付与作用を、イメージ、シンボルなどから区別される独立した作用とみなしていること。この二つが、中心的な論点である。「フッサールは、哲学の基礎に体験過程の検討を位置づけた最初の人と言えるだろう」(EP, p. 286)。ジェンドリンから見れば、フッサールは、言語に先立つ、豊かな意味をもった体験過程に直接照合し、そこで暗黙的に働いている機能を現象学的に記述したのである。また体験過程は、現象学が記述している前概念的、前客観的な現象としばしば言い換えられている¹⁰。したがって、体験過程理論は、フッサールの現象学的方法を採用する形で成立したとすることができるだろう。

しかしその一方で、ジェンドリンはフッサールをはじめとする現象学とその方法論の乗り越えを図り、新しい現象学を提唱している。ジェンドリンが強調するポイントは、総括的に言えば、意識与件の直観と記述の関係にダイナミックな進展 (carrying forward) という観点を付加することにある。「現象学は、思考ステップのある種の前進 (a certain kind of progression of thought-steps) である。後にわたしは、公刊した論文のなかで、「単なる記述」を放棄し、その代わりに「前進」を示すことで、現象学を補強し、修正しようと試みた」(NLS, p. 406)。ジェンドリンの論拠は、フッサール自身の思索のたえざる継続、および複数の現象学者による多様な論述に、求められる。「フッサールの仕事の各期間は、自分が用いている仮説や図式を切り落とすことによって、次の期間を迎える」(EP, p. 287)。フッサールはきわめて鋭敏かつ詳細な現象記述を徹底的に遂行し、その作業が進行していくなかでたえず新しいものを、ときにフッサール自身の全体的な目論見を否定するような形で、見だしていった。「フッサールは、シンプルな区別に由来してくるものよりも、ずっと多くのもをたえず見つけた」(TBP, p. 29)。フッサールの現象学的記述は、たえずその記述を超え出ていくものを同時にもち、その過剰によってさらなる記述が動機づけられたのである。ジェンドリンの提案は、現象学的方法のこうした側面を前進 (progression) として自覚することにある。

また、フッサール自身の思索の進展だけでなく、複数の現象学者が、同じ事象をさまざまに異なって記述することも、ジェンドリンにとっては同様に重要である。現象学者が記述し命題へもたらすものは、直観的明証的に確証可能なものに基づいている。それは、偶然的なものの直観ではなく、事象そのものの本質を看取する作

9. ECM, pp. 276–280.

10. Gendlin, “Experiential explication and truth”, *Journal of Existentialism*, 6 (1965/66), p. 131.

用に支えられた命題である。「こうした現象学の主張がシンプルかつ明白なものであったとすれば、現象学者たちの見解が相違することはないであろう。現象は、現象学的に使用されたすべての現象学的命題をたえず確証することだろう」(TPND, p. 322)。もし逆にこの主張が否定されるならば、ある現象学的命題はわれわれの体験に合致し、別の命題は矛盾するということを意味するであろう。そうなれば、現象学的命題は、経験的事実に関する偶然的な命題と変わらず、体験の本質直観という固有の性格をもたないことになってしまう。しかし、直観される現象と記述とのこうしたパラドキシカルな事態を、ジェンドリンはむしろ肯定的に受け取っている。現象学者の記述はさまざまに異なりうる。だが個々さまざまと言っても、それは任意になされた記述ではなく、現象(体験過程・felt meaning)との応答のうちで遂行されるものである。そこにジェンドリンは、「進展」というプロセスを見いだす。したがって問われるべきものは、現象の直観と記述の相互作用的關係、ジェンドリンの術語で言えば、felt meaning・体験過程とシンボルの相互作用的關係なのである。

直観されたもの、身体によって直接感じ取られたものを、シンボルによって言語化していく。しかしそこでは、felt meaning、現象がはじめから独立に存在し、それをありのままに写し取るというシンボル化、記述が行われているのではない。felt meaning とシンボルは、相互に作用を及ぼしあい、いわば、そのつど成立しつつ、進展していくのである。こうしたプロセスをジェンドリンは、「含意へと生起すること」(occurring into implying) とも呼んでいる¹¹。

意識の直接的与件を直観し、記述する。フッサールが提示した現象学的方法は、われわれの認識をはじめとする経験の成立を論じるものであった。言語に先立つ次元で直観される与件は、ジェンドリンが、心理療法の実践のうちで見いだした体験過程、felt meaning への直接照合と重なりあう。その意味で、たしかに心理療法は現象学的だと言えるだろう。その一方で、現象学的思考は、直観と記述の相互作用關係に対して無自覚であった。実際のところ、現象学的方法の具体的な遂行が、直観と記述の相互作用によってもたらされる非論理的ステップとしての前進、進展をもたらしているにもかかわらず、現象学はそれ自体を考察することはなかった。「フッサールとハイデガーは、定式化と体験との関係について彼らが行った説明を、自分たちの思考ステップに当てはめることをしない。彼らは定式化のモデルを選択し使用するが、そうした選択が体験に対して何を行うことになるのかを検証するために

11. あらかじめ含意されているもの、すなわち想定される可能性のうちの一つが現実化する、生起するのであれば、事態は、「含意のうちで生起すること」(occurring in implying) と表現される。しかし「含意は生起するだろうものではないし、生起したものは含意されていたものだと語ることも正しくない。このことを見てとったわれわれは、こうした関係にもとづいて語るための用語を必要とする。したがって、その関係を語るために「の中へと」(into) という語が用いられたのである」(PM, p. 10)。

立ち止まらない」(TPND, p. 322)。「現象学は進行中の暗黙のプロセスへと向かった。それは体験過程から出発したが、現象学の主張をチェックするために、体験過程へと戻ることはできなかった。——中略——たえず体験過程へと遡ったフッサールでさえ、経験にもとづく概念化の働きがたえずそれ以上のものを含意していることは理解しなかった」(CG, p. 30)。現象学的記述によってもたらされる相互作用による現象の変化、それをさらに記述していく非論理的ステップ、進展というプロセスを自覚することが、ジェンドリンの語る「新しい現象学」である。

しかし、ジェンドリン自身が悲観的に述べているように¹²、こうした提案はこれまでほとんど顧みられてこなかった。われわれは、それに対してどのような態度を取るべきなのであろうか。以下では、ジェンドリン自身が行った「現象学的記述」と「新しい現象学」の内実をより明らかにし、問いに対する一つの回答を得るよう試みていく。

III. 新しさの起源

felt meaning とシンボルの機能的関係および、その原理 (IOFI 原理) に関してジェンドリンが行った議論を概観することによって、現象学と「新しい現象学」の違いを明示し、本論考の結論へつなげていくことにしよう。

ECM の第3章で、ジェンドリンは体験過程が認知においてどのように働いているかを解明するために、felt meaning とシンボル¹³の機能的関係について詳細に論じている。felt meaning とシンボルは、七つの異なる状態で機能している。両者に一対一対応の関係がある平行的関係として、「直接照合」・「再認」(recognition)・「展開」(explication) の三つが、さらに非平行的な創造的關係として「メタファー」・「把握」(comprehension)・「関連」(relevance)・「言い回し」(circumlocution) の四つが挙げられている。

直接照合は、前述のとおり、前概念的で身体的な体験過程、felt meaning (ECM では感情 feeling とも言われる) に内的に触れることを意味する。端的に言えば、身体的に感じられている意味に対して注意を向けることだが、その場合でも何らかの言葉、シンボルが相互的に働いている¹⁴。「この感じ」「これ」「今日わたしがするつも

12. 「現象学そのものにわたしが望んだ変化をもたらすという点で、わたしはまったく無力であった」(NLS, p. 408)。

13. ここでのシンボルは、言語的なものに限定されず、身振りやイメージなども含んだ広い意味で用いられている。

14. 日常的に何か文章を読んだり、発言をしったりする場合、われわれはいちいち自覚的にその語の意味を考えることはなく、漠然と暗黙にそれらの語を理解している。しかし、その語を定義しようとすれば、その有意味性についてのフェルトセンス [=感じられた感覚] へ集中するだろう。felt meaning へのこのような集中が、直接照合である。他にジェンドリンが好んで

りだったこと」といったシンボルによって、われわれは感情に直接照合し、「一つの felt meaning が特定される。シンボルなしには「一つのこの感情」は存在せず、felt meaning がなければ、シンボルが象徴機能を果たすことはできないのである。再認は、馴染みのあるシンボルを見たり、聞いたりするとき、そのシンボルによって、felt meaning が呼び起こされる働きのことである。展開は、再認によってあるシンボルから呼び起こされた felt meaning が、異なるシンボルによって、さらに象徴化される事態を表している。再認された感情 [felt meaning] は、さらにそれを展開 [解明] するためにシンボルを選び出すという力を行使する。これら三つの機能的関係は、felt meaning とシンボルの間で平行的なものであり、いわば、意味の理解がより深まっていく働きとして記述されている。

それに対して、非平行的関係は、felt meaning とシンボルとの間に一種のずれが生じ、意味の理解とともに新しい意味の創造が行われるものである。中心的なのは、メタファーと把握である。メタファーは新しい意味を創造する。メタファーに関する代理説 (substitution view) にしたがえば、メタファーは字義的な意味だけではなく、比喩的な意味をもつことによって成立する。例えば「マキさんは猫だ」という文は、マキという名前の猫がいるということを表明しているのではなく (そのような字義通りのケースもありうるが)、マキさんという人物と猫の間に何らかの類似性 (しなやかな身体の柔軟性、気まぐれな性格、ひなたぼっこが好き…) にもとづいて、メタファーが成り立っているとされる。それに対して、ジェンドリンのメタファー論は、I. A. リチャーズに典型的な相互作用説に依拠していると考えられる¹⁵。あらかじめ見いだされる類似性にもとづき、主語に対して字義の意味とは異なる意味をもつ述語が結びつけられるのではなく、隠喩表現がなされることによって、主語と述語双方の意味がこれまでとは違った形で際だってくるという見解である。「メタファーは、古いものと新しいものの間の二つの関係を含んでいる。(1) 古い体験が影響を受け、その結果、新しい felt meaning が生じてくる。(2) 古いシンボルとその意味が、新しい意味を概念化する新しい仕方で用いられる」(ECM, p. 113)。あるシンボルに伴う馴染みの felt meaning に対して、メタファーは新しい felt meaning を創造するのである。一方、把握とは、まだシンボル化されていない felt meaning がその新しいシンボル化を創造するように機能する場合のことである。メタファーという機能関係にあって、新しい felt meaning の創造は、比喩表現を読んだり聞いたりしたときに限

挙げる例では、忘れてしまっていることを思い出すケースがある。今日の午後やるべきことがたしかにあったが、それが何か思い出せない。友人にメールを打つことだったか、事務室へ行くことだったか、それが何であったか、われわれは自分の体験過程へ直接的な注意を向けている。

15. I. A. リチャーズからの影響に関しては、ジェンドリン自身が詳細に語っている。Cf. ECM, pp. 288–293.

られる。しかしメタファーを用いる詩人などは、独特の仕方を感じられている *felt meaning* を表現するために、独自のメタファーを作り上げる。この関係をジェンドリンは把握と呼ぶのである。「したがって把握には、それを言語化しようとするこの体験への直接照合、語が通常呼び起こす体験や感情の再認、さらにこれらの語を、新しい体験の側面を創造するために用いるというメタファーが、含まれている」(EP, p. 296)¹⁶。

これまで確認してきたように、現象学的方法としても捉えられる現象と記述の関係が、ジェンドリンにおいては細分化され、双方向的な機能的関係として論じられていることが理解できるだろう。さらにジェンドリンは、これらの機能的関係を普遍的原理としての IOFI 原理、「それ自身の事例」(an instance of itself) の適用であると捉えている。IOFI 原理、「それ自身の事例」とは、「特定されたある何らかの意味は、ある種類の体験過程手続きの事例であり、かつ、同時に体験過程手続きとしてのそれ自身の一事例である」というものである。われわれは、思考作業のうちで用いられるどのような語・意味・手続きに対しても、方法論的考察(方法論的な反省)をいつでもどの段階でも遂行することができる。*felt meaning* に、それがどのようなタイプのものかを問う方法論的考察を加えるならば、与えられた意味を、一般的な方法論的カテゴリーの一事例とみなすことになる(ECM, p. 176)。例えば、漠然とした不快な感じを身体的にもつとき、直接照合によって「これ」と指示される *felt meaning* はいったいどう呼ぶべきなのかと反省しているとしよう。こうした反省(上記の方法論的考察)によって、この感じに「重苦しいモヤモヤした感じ」という表現が与えられる。こうしたプロセスによって特定されたこの感じは、「重苦しいモヤモヤした感じ」というカテゴリーへ普遍化される。したがって、この感じは以前〇〇の時にあった不快感と同じだという把握がなされる。それは同時に、「重苦しいモヤモヤした感じ」という種類の一事例として、今ここで直接感じられている「これ」を特定化しているのである。すなわち、*felt meaning* とシンボルの機能関係の進行によって、体験過程のうちで、「これ」を特定化する「存在化 *entitizing*」という働きと、「これ」の新しい側面を創造する[新しい理解を可能にする]「普遍化 *universalizing*」の働きが同時に起こっており、体験過程の一事例と種(類)の間には、再帰的同一性(*reflexive identity*) (ECM, p. 184) が見いだされるのである。ある一つの意味の特定化は、同時にその上位カテゴリーの創造であり、それはさらにカテゴリーの個別

16. 残りの二つ「関連 *relevance*」と「言い回し *circumlocution*」も簡単に触れておけば、あるシンボルを理解するためには、非常に多くのそれに関連する意味や体験(例えば、過去の体験やコンテキスト、先行してなされた議論…)が必要である。このとき、*felt meaning* は、シンボル化を理解可能にするために機能している。これが関連 *relevance*、関連する *felt meaning* と呼ばれる。また言い回しとは、さまざまなシンボルの連続によって、他のシンボル化が理解可能なものになるように *felt meaning* を作り出すことである。

的具體化へ通じていくダイナミックなプロセスの原理なのである。「こうした原理はまったく明白であるにも関わらず、一般に気づかれることも、述べられることも、利用されることもない」(ECM, p. 176)とジェンドリンは指摘する。したがって、このような IOFI 原理を現象学は自覚的に利用すべきであるというのが、ジェンドリンの主張なのである。「体験過程は、どんな場合でも連続である。——中略——このプロセスは、一方で、含意されているもの、他方で、言明や行為、そうした両者の間のジグザグ運動である」(NPCF, p. 136)。

「それ自身の事例」という独自の的方法論的原理に自覚的であったかどうかを別にすれば、ジェンドリンによる体験過程の詳細記述は、構成する作用と構成される対象との相関関係を問うたフッサールの現象学的方法とそれほど違いがないように見える。しかしここで注目すべきは、池見も指摘しているように¹⁷、再帰性 (reflexivity) である。ジェンドリンは、モハンティの「体験と意味」という論文をめぐるやりとりのなかで、再帰性と反省 (reflection) の区別を明言している¹⁸。自己の体験作用を言語的に表現しようとするとき、フッサール現象学にあつては、それは反省という内在的知覚によって遂行される。主観が、自己の意識体験のありさまを対象として直観的に捉え、記述していく。ジェンドリンはこうした知覚モデルを徹底的に拒否する。「暗黙的なものを直接見たのであれば、そこにはただ明瞭な知覚があつたはずだ、とフッサールは決めてかかっている。こうしたことを想定する必要はない。フッサールは、このような知覚モデルを、反省的、現象学的なレベルからなされるすべての報告に拡張してしまった」(NPCF, p. 140)。フォーカシングという心理療法の実践においても、IOFI 原理による意味創造プロセスの哲学的記述においても、その報告は、知覚モデルではなく、身体感覚的な再帰モデルによって行われるべきなのである。フォーカシングの実践者は次のように述べている。「筆者がフォーカシングでいう“からだ”についてそれなりに理解できたと思えたのは、——中略——セッションで自身がフォーカサーとして“からだ”の声を聴き、“からだ”に身を任せ、その知恵に触れることを体験したときであつた」¹⁹。言語化に先立つ次元で身体的に感じられている体験過程、felt meaning に身体 (からだ) で触れていくとき、そこにはたえざる変化と新しい意味の創造が生じていく²⁰。それはたしかに身体のうち暗

17. 池見陽『僕のフォーカシング＝カウンセリング ひとときの生を言い表す』創元社、2010年、54-58頁。

18. J. N. Mohanty, “Experience and Meaning”, in *Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy*, Evanston: Northwestern University Press, 1997, p. 189.

19. 三宅麻希、奥村哲朗「初心者フォーカサーのフォーカシングセッション体験と導入時の留意点について」関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要創刊号、2010年、p. 48。

20. 後期の主著『プロセスモデル』では、こうした事態を「万事連関」(everything, everything by everything) という用語によって表現している。すべての出来事は交差し絡みあつて機能しており、要素の成立はその相互影響にもとづくという主張である (PM, pp. 38-46)。

黙的に存在した。しかし体験過程の流れのなかで生起してきたものは、その生起というプロセスによって変更を被るがゆえに、新しいものであり、以前にはなかったものである。それは再帰的なプロセスであるがゆえに、体験過程はどんな場合でも連続なのである。このことを誰もが実感できるだろう一つの例を出した後、結論へ移っていこう。

論文のアイディアが浮かび、あれこれと考えていた。同じ興味をもっている友人にそのアイディアを語ってみた。熱弁をふるっていたとき、自分が考えていたのは、そういうことだったのかと、友人以上に、納得する自分に気づく。暗黙に含意されていたものが、シンボルによって表明化される時、その語るというプロセスによって再帰的に影響を受けて、生起してきたのである。わたしは、友人に語り自ら納得した考えに動機づけられて、さらに思索を深めていく。

最後に ジェンドリンの提案をどのように受けとめるべきなのか

ジェンドリンが提唱したのは、これまで論じてきたように、身体的な直接的与件 *felt meaning* の記述にあって必然的に生じる再帰的なプロセスを進展として捉えて現象学的思索のうちへ自覚的に取りこみ、それを利用してさらに現象学を前進させるということだった。

意識と世界の構成的な相関関係を、意識が問う。こうした問題設定には、反省の無限遡行や自我分裂の問題がたえずつきまとう。その危うさに現象学はきわめて敏感だった。フッサールやメルロ＝ポンティの身体論は、その再帰性に関する豊かな論述を展開している。意識流のありさまを作用とその結果という観点から意識が記述しようとするとき、そこには、必然的に再帰的な影響関係を認めざるをえない。たとえ超越論的主観性と内世界的な主観性との相違を持ち出してきても、それは異なってはいるが同一の主観性であるかぎり、それ自身の具体化・世界化として、それ自身の事例として、再帰的でなければならないはずである。しかしこのことは、現象学的記述の不可能性を指摘するものではなく、むしろ現象学の際限ない改訂可能性と、その哲学的含意の新たな創造を保証しているのではないだろうか。再帰的な IOFI を自覚した現象学の可能性は、引き受けるべき一つの可能性である。

われわれの体験流は、地平的な予描のもと意味志向と意味充実という志向的構造をもって経過し、充実された意味は明証性を支える基盤として体験流に取りこまれ、さらなる予描を可能にする。こうして体験は安定的な日常性を獲得していく。しかしどれほど安定したものであっても、そこには現実化（ジェンドリンの用語で言えば、生起）という契機が、ある種の新しさを付け加えていく。突発的な不意打ちでなくとも、地平的に志向されていたものが、われわれに何かを気づかせ、驚かせ、進展させることはある。

明確にまだ言葉にならず、身体を通して暗黙的に感じられていた意味には、われわれの体験や行動を導く多くのものが含意されていた。しかし、顕在的に生起してきたものは、そこには存在していなかったのである。現実には、そこにあつて、そこになかったのである。さらに、ジェンドリンがフッサール現象学に対して指摘したものは、たしかに現象学のうちに含意されていたが、しかしそこにはなかったものである。

最後に一言、ジェンドリンに対して批判的なコメントも付けておきたい。ジェンドリンの議論は徹底的に自己言及的であり、どこまでも相対主義的である。「われわれ自身の用語は相対的である。体験された意味の認知における機能をわれわれは直接照合する。この機能は、われわれが用いたのとは違う語によっても、定式化される」(ECM, p. 195)。もちろん、ポストモダニズムを超えるという視点のもと、ジェンドリンは相対主義を批判しているが、ここまでの強い自己言及的な論述を受け入れたとき、われわれは立脚点をどこにおけばよいのか。「不幸にも、体験過程は、無秩序とも言われてきた」(NLS, p. 410)。それに対する論述もまた、われわれが継承すべき課題の一つと言えるだろう。

文献

- Gendlin E.T., *Experiencing and the Creation of Meaning. A philosophical and psychological approach to the subjective*. New York: Free Press of Glencoe.1962, Reprinted by Macmillan, 1970. 改訂版 Northwestern University Press, Evanston, Illinois, 1997. (ECM と略記)
- Gendlin E.T., “Experiential explication and truth.” *Journal of Existentialism*, 6, 1965/66
- Gendlin E.T., “Experiential Phenomenology.” in M. Natanson (Ed.), *Phenomenology and the social sciences*. Vol. I, pp. 281-319. Evanston: Northwestern University Press. 1973. (EP と略記)
- Gendlin, E.T., “Befindlichkeit: Heidegger and the philosophy of psychology.” *Review of Existential Psychology and Psychiatry*, 16 (1-3), 43-71. 1978/79.
- Gendlin, E.T., “Two phenomenologists do not disagree” In R. Bruzina & B. Wilshire (Eds.), *Phenomenology. Dialogues and bridges*, pp. 321-335. Albany, NY: State University of New York Press. 1982. (TPND と略記)
- Gendlin E.T., “Phenomenology as Non-Logical Steps.” In E.F. Kaelin & C.O. Schrag (Eds.), *Analecta Husserliana*, Vol. XXVI: *American phenomenology. Origins and developments*, pp. 404-410. Dordrecht: Kluwer. 1989. (NLS と略記)
- Gendlin E.T., “Thinking beyond patterns: Body, language and situations.” In B. den Ouden & M. Moen (Eds.), *The Presence of Feeling in Thought*, pp. 25-151. New York: Peter Lang. 1991. (TBP と略記)
- Gendlin, E.T., “The primacy of the body, not the primacy of perception”, *Man and World*, 25 (3-4), pp. 341-353. 1992.
- Gendlin E.T., *A process model*. New York, The Focusing Institute 1997. (<http://www.focusing.org>). (PM と略記)

- Gendlin E.T., “The responsive order: A new empiricism.” *Man and World*, 30 (3), pp. 383–411. 1997.
 (RO と略記)
- Gendlin E.T., “The new phenomenology of carrying forward.” *Continental Philosophy Review*, 37 (1),
 2004. (NPCF と略記)
- Gendlin, E.T., “What first and third person processes really are”, *Journal of Consciousness Studies*,
 16, No. 10–12, pp. 332–62. 2009. (FP と略記)
- Gendlin, E.T., “A changed ground for precise cognition” New York, The Focusing Institute 2009.
 (<http://www.focusing.org>) (CG と略記)
- D.M. Levin (Ed.), *Language beyond postmodernism: saying and thinking in Gendlin's philosophy*,
 Evanston: Northwestern University Press. 1997.
- Mohanty J.N., “Experience and Meaning”, in *Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking
 in Gendlin's Philosophy*, Evanston: Northwestern University Press, pp. 176–189. 1997.
- ジェンドリン・池見陽 『セラピープロセスの小さな一歩：フォーカシングからの人間理解』
 金剛出版、1999年
- 池見陽『心のメッセージを聴く——実感が語る心理学——』講談社現代新書 1241、1995年
- 池見陽『僕のフォーカシング＝カウンセリング ひとときの生を言い表す』創元社、2010年
- 田中秀男「ジェンドリンの初期体験過程に関する文献研究（上）：心理療法研究におけるディ
 ルタイ哲学からの影響『図書の譜：明治大学図書館紀要』8, pp. 56–81、2004年
<http://www.lib.meiji.ac.jp/about/publication/toshonofu/tanaka.pdf> に転載
- 三村尚彦「ジェンドリンとフッサール——進展（carrying forward）の現象学——」『ディルタ
 イ研究』第20号、63–79頁、2009年
- 三村尚彦「ジェンドリンとポストモダニズム——プロセスの論理——」『関西大学文学論集』
 第59号-3、一～二六頁、2009年
- 三宅麻希、奥村哲朗「初心者フォーカサーのフォーカシングセッション体験と導入時の留意点
 について」『関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要』創刊号、pp. 47–66、2010年
- 諸富祥彦編『フォーカシングの原点と臨床的展開』岩崎学術出版社、2009年
- 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘 編著『ジェンドリン哲学入門 フォーカシングの根底にある
 もの』コスモス・ライブラリー、2009年